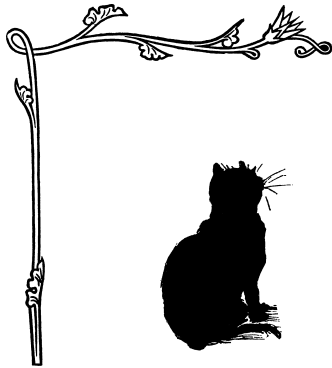
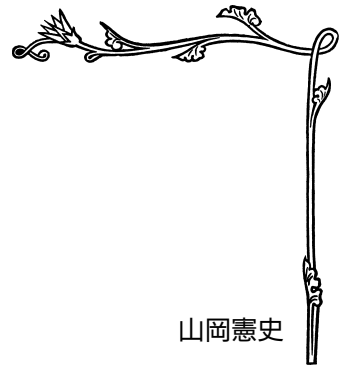




ちよつとフレイク
読書の時間



斎藤兆史 著

『英語達人塾』

一極めるための独習法指南一』

山岡憲史

花火と火薬

筆者、斎藤^{よしふみ}兆史氏は東京大学大学院総合文化研究科の助教授である。同大学院のHPから入っていくと、斎藤助教授についてのプロフィールがある。専門の紹介には「主に文学を中心とする英文テキストを言語(学)的に分析する研究を行うと同時に、文学と言語学を融合させる理論の確立を目指している」とある。*The Expanding Universe of English*の著者に名を連ねる、東京大学英語教育改革の若き推進者の一人である。

「英語学習を軽々しく論じる人たちは、たとえて言うなら、英語を花火のようにきれいなものだと思っている。火のつけ方さえ覚えれば、誰でも簡単に楽しめるものだと思っている。」(あとがき p. 183)

斎藤氏の主張は終始一貫して、「英語を扱うのは爆弾処理の仕事」であり、「花火ごときの知識では到底太刀打ちできない」というものである。すなわち、文法軽視でただ「ペラペラと」初歩的な会話ができたとこで、それは英語力でも会話力でもなく、単に夜空に一瞬きらめく花火のようなものであって、爆弾を処理する力は身に付かないと語る。

文法・訳読賛歌？

現在、学校英語教育はコミュニケーション重視の方向で改革が進んでいる。新しい学習指導要領にも、「外国語を使って日常的な会話や簡単な情報の交換ができるような基礎的・実践的なコミュニケーション能力を身に付けることがどの生徒にも必要になってきているとの認識に立つて…」と、日本人の英語によるコミュニケーション能力を引き上げようという意志が強く感じられるし、「英語が使える日本人育成のための

戦略構想」に盛り込まれた種々の構想からも、その決意のほどが窺い知れる。

しかし、斎藤氏は本著で再三にわたり、現在試行錯誤的に行われている「コミュニケーション能力」向上を目指した教育法を批判する。「いままでの文法・訳読中心の英語教育がそのような英語力の養成にあまり貢献してこなかったとの認識に基づいて、あたかも文法・読解学習が間違った英語学習であるかのような議論がなされることが多い。(まえがき)」が、「文法の学習なくして外国語の上達はあり得ない。最近では(中略)文法的な間違いを恐れずに自己表現せよ、というような、学習の基本に反する指導法が好まれる傾向にあるようだが、これは日本の英語教育にとってまことに嘆かわしきことである。(p. 41)」と主張し、「どんなに時代が変わろうが、基礎的なことを何度も何度も繰り返して体の中に練り込むという学習の基本は変わらない。(p. 34)」観光や日常の用足しに「ペラペラ」しゃべれることが英語学習の目的ではない、という主張に溜飲を下げる人も多いであろう。

達人の学習法

しかし、斎藤氏の認識は、よく我々が問題にする「文法か会話か」という二律背反めいた議論とはかなり質を異にする。

本書の随所から知ることのできる筆者の英語力には端倪すべからざるものがある。前述のような主張に触れると、「オーラル」には全く無関心で、ただ文法・訳読の権化のような印象を受けるが、読む・書くという能力だけでなく、いわゆる「オーラル」の面でも卓越した力の持ち主であることは、例えば第10章「視聴

覚教材活用法」で見事に示されている。

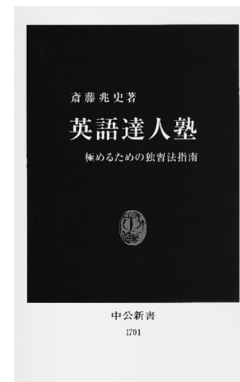
筆者によると、聞き取り用の教材は4種類に分けることができる。まず、「聞き流し」用。これは、英語の音に耳を慣らすことが目的で内容はあまり理解できなくともよい。2つ目は「物真似発声」用。内容は完全に理解できなくとも、時々耳慣れた語句をまとめて聞き取ったときにその発声を真似するやり方。3つ目は「聴解・書き取り」用。いわゆるディクテーションである。4つ目は「反復再生」用。同じ教材を何度も再生しながら物真似発声を繰り返すやり方である。実に見事な分類である。

筆者は、本著の中で、新渡戸稲造、斎藤秀三郎、岩崎民平といった英語の達人の学習法に言及しながら、現代のように英語学習の環境がない時代に、彼らがいかに並はずれた英語力を身に付けたかを紹介しているが、素読や文法解析、暗唱、丸暗記といった、今でこそ形式的で「流行らない」方法こそが、実は理に適ったものであると声高に説く。(過去の達人の勉強法については、同じ著者の『英語達人列伝』に詳しい。)

幣原喜重郎は、毎日4ページ分の英文を覚え、先生の前で暗唱・復習をしたという (p. 70)。西脇順三郎は、若い時分に『ナショナル・リーダー』を始めとする英語の教科書や教材をひたすら丸暗記した (p. 105)。一見非創造的とも思える勉強法の意義を実例を交えて語る筆者の口調の滑らかさの裏には、「いかなる勉強、いかなる技能の習得に置いても、かならずどこかで馬鹿正直に知識を脳に詰め込む段階が必要となる (p. 104)」という信念がある。

作文上達法

「高度な内容のことを口頭で伝えられるようになりたかったら、作文の練習をみっちりやっておくとよい (p. 118)。」—これはディベートの授業などで常々生徒に言い聞かせていることであるが、本書から大きなヒントを得ることができた。斎藤氏は、多読や音読で目にした英文や英語表現をストックしておいて、最初のうちは継ぎはぎだらけでもいいから、見たことのある表現だけを使って作文をする習慣を身に付けるべしと力説する (p. 121)。生徒の書いた英語には壊れた英文が散見する。曖昧な文法知識で英語を構成し、和



『英語達人塾』(中公新書)
斎藤兆史 著 ISBN4-12-101701-3 ¥700 (税別)

英辞典で見た単語を前後関係や意味用法を無視して当てはめているだけの「ひとりよがりの英語」である。

いくらコミュニケーション重視と言っても、無から有は生じない。挨拶程度はできたとしても、英語のストックが貧弱ならば、決して有意な内容の英語は話せないのである。深い内容に関して「ペラペラ」にはなれない。

英語修業

しかし、考えてみれば、現在コミュニケーション主体の英語教育を推進する私たち教師も、その昔は、程度の差こそあれ、暗唱や音読、文法解析といった伝統的な方法で勉強してきたのである。私自身が最も英語力が付いたのは、ボロボロになるまで英英辞典と格闘して和英辞書の編纂をしていた時と、いくつもの映画の台詞を全て transcribe するという半ばマニアックな勉強をしている時であった。日本人にとって英語の学習が困難を伴うことを自覚して、あくまでも基本に忠実に訓練するしかない、という斎藤氏の考えは極めて正しい。いたずらに学校文法や訳読を敵視するのではなく、手垢にまみれたように思える学習法の中に光る真実を、コミュニケーションという目的に使うための魅力ある輝きにするのが私たちの務めであると、本書を読んで考えた。

(やまおか けんじ・滋賀県立米原高等学校教諭)